

人間中心の まちづくりから 新しい 公共空間の創造へ

事例 **ゲール**
Gehl

所在地：
コペンハーゲン、デンマーク
概要：
人に優しい都市空間のコンサル
タントとして世界で活躍
中のヤン・ゲール氏が主宰す
る都市デザイン事務所。
URL：
<http://gehlpeople.com/>

歩ける都市の壮大な実験

コペンハーゲンを東西に貫く約1
キロメートルほどの目抜き通りスト
ロイエは、毎日多くの人で賑わう、
ヨーロッパでも最長の歩行者天国の
ひとつとして知られている。デン
マークを代表する建築家・都市デザ
イナー、ヤン・ゲール (Jan Gehl)
氏が創立したゲールはその西端にあ
たる市庁舎広場から、少し西へ離れ
たところにある。彼の名はそのスト
ロイエとともに世界中へ広がったと
いっても過言ではない。自動車では
なく、歩く人々を主役とした都市生
活が、どれほど豊かなものか。その
思想は静かに、そしてゆっくりと世

界中の都市生活に影響
をあたえつつある。

「1980年代から
90年代にかけて、コペ
ンハーゲンは『倒産』
という言葉で表現され
るほどのひどい状況で
いたただけでなく、都
市としての魅力もなく、
誰も住みたがらないま
ちだったのです」

今は「世界一住みや
すい」とも称されるコ
ペンハーゲンの過去を
そう表現するのは、『パブリックラ
イフ学入門』の共著者でもあるピア
ギッテ・スヴァア (Bjergte Stæhr) 氏。
ゲール氏たちの詳細な調査・分析に
もとづくアドバイスが行政を動かし、
少しずつ都市のあり方を変えてきた、
その道のりをよく知る人物だ。

「たとえば、ここには自転車文化と
でもいべきものがあり、今は大き
な意義をもっています。自転車道路
が市の全域に張り巡らされています
が、これも80年代にはそれほどは
ありませんでした。私たちは、コペ
ンハーゲンをいわば実験室のような
場所として使っています。人々は何
のように公共空間を使っているの
か？ 詳細な調査を繰り返し行っ
てきました。何か新しいものをつ

くったら、それが誰にどんな変化を
起こしたのかを観察して、細かく記
録をとって伝えてきたのです」

人々はその場所で どんな時間を過ごしたいのか？

コペンハーゲンにおけるそうした
蓄積が、世界で求められるものにな
りつつある。スヴァア氏によれば、
ゲールのコペンハーゲン本社は45人
のスタッフを抱えている。このうち、
最も多いのは建築およびランドス
ケープの専門家だが、ほかにもス
ヴァア氏のような現代の比較文化や
文化人類学を専門とするスタッフな
ど、多様な知性が集う。海外からの
コンサルティング依頼が多くなった
今はニューヨークとサンフランシス
コにも支社をもち、世界各地に10名
のリーダーをプロジェクトごとに配
置して、現地スタッフとともに仕事
を行っている。

「詳細な調査やさまざまな視点から
の分析が大切なのももちろんですが、
地元の専門家との連携もひじょうに
重視しています。その場所がもつ歴
史的、文化的コンテクストを理解し
ている人々が提供してくれる深い知
を入手できなければ、真の問題解決
にはつながりません」

ゲール氏がオーストラリアのメル
ボルンに招かれ、「人間中心のまち」
として再生に関わりはじめたのが

1993年。その後、「都市生活者
が望むものを手に入れるのに、最大
でも20分しかかからないまち」を実
現したみごとな成果は、世界中で認
められている。さらに、モーターリ
ゼーションの一大中心地とも見られ
ていたアメリカ合衆国、ニューヨー
クの中心街でも2008年からブ
ロードウェイの一部を歩行者用に転
用する事業が始まり、多くの人を驚
かせた。日本はこの分野で後れを
とっているとわざわざをえないが、

2015年にUR(都市再生機構)
がゲールと連携し、東京の大手町川
端緑道で公共空間活用についての
ワークショップを開催している。

「大きなプロジェクトをやろうとす
ると、問題点の羅列になってしまっ
ていきます。私たちはそんなと
き、まずは小さなプロジェクトに
フォーカスして、そこから広げてい
くというやり方をとっています。ど
んなに小さなプロジェクトでも基本
的な哲学は同じです。人々はその場
所でどんな時間を過ごしたいのか？



今回お話を伺ったピアギッ
テ・スヴァア氏。

それは誰のためのものであるべき
なのか？ 大切なのは、人々の生活
をスタートに位置づけ、それから空
間の使い方、建物を考えていくこと
です。私たちのような建築家やプラ
ンナーと呼ばれる人たちは、この順
番を逆にしてしまいがちです(笑)」

パブリックがプライベートに 近いところで連結する

2014年にはゲール氏ととも
に来日したこともあるスヴァア氏は、
素材へのこだわりや、シンプルさを
大切にしているデザインなどに、日本文
化とデンマーク文化の親和性を強く
感じたという。

「日本でも公共空間についての考え
方に大きな変化が起きつつあるよう
ですね。けれども、個別の目的に応
じて建物をつくり……ということ
を繰り返しても、全体をまとめるよう
なマスタープランなりフレームワー
クがなければ、うまくいきません」
多くは語らないものの、彼女が垣
間見た東京の都市生活については、
厳しい目を向けているようだ。この
半世紀でコペンハーゲンが取り組ん
できた問題の多くが、そこにまだ
残っていると感じたはずだ。

「コペンハーゲンを散歩すると、よ
くアパートメントの1階にある中庭
部分が見えるでしょう。実はかつて、
そこはアスファルトで固められてい

たのですが、今は緑を目にすること
が多い。市は中庭の緑化を助成する
制度を用意し、その流れを応援して
います。また今のコペンハーゲンは
各エリアが画一化することなく、住
空間と職場の機能が混じっています
が、これは古いものの再生とは違う
レベルで、新しく生まれてきたもの
なのです」

学校があり、病院があり、図書館
があり、市役所がある……：：：そういつ
た公共空間が人々のプライベートに
近いところでゆるやかに連結して、
機能する。コペンハーゲンやメルボ
ルンに共通する都市計画のあり方だ。
最後に、日本でも話題になること
が多くなった、「スマートシティ」
についての考え方を聞いた。

「スマートシティは、あくまでも道
具でしかありません。技術を使って
人々のニーズを知り改善の役に立
てる、便利なものではない。でもそれ
だけだったら、ロボットの住むまち
のようなものでしかありません。
新しい技術というのは、使い方が問
題なのであって、大切なのは、人々
はその場所でどんな時間を過ごした
いのか？ という問いかけです」
人こそが大切であり、つねにそこ
から出発して新しいものをつくって
いく。これほどシンプルなことを持
続けていくことの重みを感じずには
られない、印象的な訪問となった。

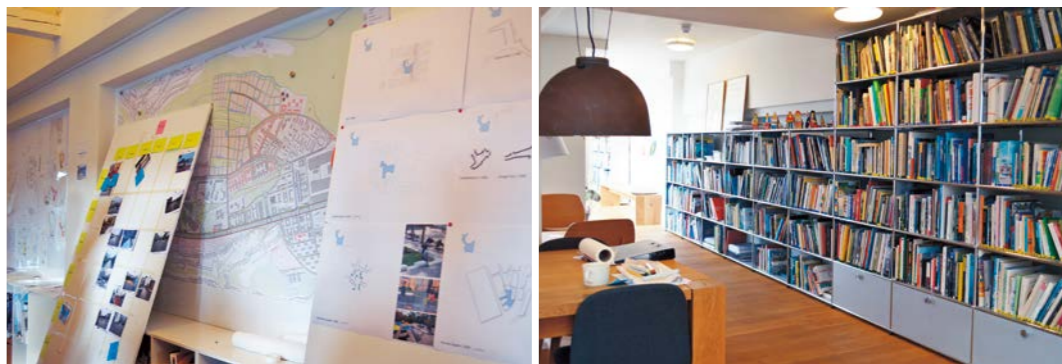
Life

Space

Buildings



ゲールのコンセプトを表した図。彼らの都市デザインはつねに人中心で考えられている。



右/ゲールのオフィスには壁一面
にさまざまな分野の本が並ぶ。
左/現在進行中のプロジェクトに
使用されているリサーチマップ。